

新刊紹介

カントの宗教論 佐野 勝也著

本書はカントの哲學に深き理解を有する著者がカントの「單なる理性の限界内における宗教」所謂「宗教論」を原文を逐うて解説されたものを主稿とし、外に著者の論文を八篇加へて一冊としたものである。カントの宗教哲學は右の宗教論を讀むだけでは不十分であることは言ふまでもない事である。殊に三批判書にわたつて研究する必要があるけれども、やはり一部にましまつたものとして特に「宗教論」をあげなければならぬ。しかも必ずしも通讀しやすくない「宗教論」を著者が章節を逐うて解説し、世の研究家を益されたことは此の方面の文獻の多くない學界にまつて感謝しなければならぬ。

次の八篇の論文はカントの宗教論に關するもの三篇に外に著者のカント研究より生れた宗教哲學的な考察によつて作られた論文である。これらが大成されて氏独自の宗教哲學の體系が組織される日を切に期待するものであ

る。(東京麹町區内幸町内幸ビル理想社出版部、定價貳圓)

真理と其決定 山口 諭助著

本書は現代認識論の研究の成果に對して、著者の批判を大膽に加へたものである。その一部は既に「哲學雜誌」に發表されたものであるが、今回それを訂正修補して、更に他の論考を加へて、全體を組織的にまこめたものである。認識論に二つの責務がある。一は我々の認識能力を吟味して認識の限界を明識し、以て哲學及び學一般が放恣なる獨斷論に陥るのを防ぐこと、二は認識を究極的に權利づける事によつて哲學的認識及び他の學的認識一般を基礎づけ、之を究極的に確立することにである。しかし現代の認識論の成果は之を成し置けたか。著者はこの二つの責務について十分成功してゐないを信じて現代認識論の哲學の業績を再批判し、右の要求に應ずるに足る認識論の建設を望んでゐられる。

その説の當否はとにかく、著者の勇氣と眞摯なる態度は十分に認めなければならぬ。(東京市本郷區龍岡町山口方眞理と其決定社發行、定價貳圓五拾錢)(高橋紹介)